部報

五週年記念特集

創刊号

全学習院バスケットボール倶楽部

銘肝の歌

大塚洋三

大田の里に宿りして
日毎鍛へし我が力
その甲斐もなく我が夢は
雄雄を決す一戦に
水泡のごと消えさりぬ

目次

バスケットボール部の五週年記念誌によせて ……鈴木正三……二
籠球部の思い出 ……鈴木久雄……三
実力のないもの ……正田宏二……四
ちょっぴり苦話 ……伊藤博……五
生れたての記 ……渡辺末吾……六
闘争戦の思い出 ……佐藤堅次郎……七
大学創立期の籠球部 ……櫛井徹……一三
昭和二十五年度大学籠球部の足跡 ……堀堅次……一三
一九五一年度より未来への期待 ……大塚洋三……一四
目次、詩 ……一 大学新リーグ戦績 ……一五
総合記録 ……一六 会員名簿 ……一八
編輯後記 ……一九 スケジュール ……二〇

バスケットボール部の五週年記念号によせて

鈴木正三

天皇誕生日にあたる四月廿九日は丁度バスケットボール部が発生してから満五年になったので五週年記念会を持つ事にした。三十余名の関係者が集って盛大に会が終った。部を作って下さった恩人である渡辺未吾先生や荷見先輩から当時の思ひ出話があり感銘深く部員の胸裡に刻まれた事と思はれる。

部長である私はこの日色々なことを考へた。その一端を披瀝することに依ってこの五週年記念号の発刊によせたい。

元来バスケットボール部は「真面目」であることをモットーとして来ている部であり然るとして努力することに依って今日ある事を得たのである。既に故人になられた剣聖高野佐三郎先生は「若いうちに出さない汗は老いて涙となって出る」と言っている。けだし金言である。私は地味で真面目であれといふ部のモットーをこの金言に照らして指導してきたし今からもさうして行きたいと思っている。真面目にやるバスケットを通して部が生長発展するならばバスケットは科学的であり協調性が多分に要求されているスポーツであるから道理心財を貫いてこそ始めて其の真価が発揮されるよう。

道理心財を貫くことはこのスポーツの真姿であり人生の真姿でもあると思ふ。部員諸君はこの言葉を真に体得して部の成長発展に貢献していただきたい。さうすれば技術は向上し不動の人格は自ら長成されて部生活をする意義も樂しみも生ずると思ふ。かくして部に入ってよかったと考へるようになることであらう。

最後に部発展の恩人である諸先生や先輩の諸兄に感謝すると共に部員諸君の健康と協力とを願ってやまない。

（昭和廿六年五月十二日記）

籠球部の思ひ出

鈴木久雄

部創立五週年記念として部報を発行する事になり私に何か昔話をせよといふ御註文をうけたが実の所何を書いてよいのか当惑してしまった。しかし私の学習院の三年間はそのまゝ籠球部の生活であったといふことからみても楽しい思出はつきない。その一つ二つを綴ってみよう。

僕が学習院に入学した時は部も出来たばかりで部員も多勢いた。文科からはNもTもBもHもOもいた。しかし次第に居なくなって僕だけになってしまった。その二人とは別に何とも思はなかったけれども丁が退部する時に言い残した言葉は今でも僕の頭に沒み込んでいる。丁は〝学習院の三年間籠球ばかりやっていたと言はれるのは嫌だ。〟と言って退部して行ったのだ。去る者は追はず。各人それぞれ〳〵理窟があるのだからと思って何も言はなかったけれども僕はホントに籠球ばかりしていると云はれたかった。そして現在でも学習院時代籠球ばかりしていて非常によかったと思っている。

公式戦は十数回やっただろうか。そして又思い出せば全部覚えてはいるが何といっても印象に残るのは第一回インターハイと第二回インターハイ及び対第二師範戦の三つである。第一回インターハイは始めての公式戦として第二回のそれは僕の最后の公式戦として最后のそれは後にも前にもたった一回の勝利の快感を味わい得たゲームであったからである。第一回の時は僕はガードで試合開始直後ハーフラインからロングショットをきめ相手が勇ち起るのを夢中で聞いたが甚だ良い気持であった。しかし今から思ふと何故あんなことをしたのか思い出しても恥しい限りである。第二回の時は対武蔵高校戦で一年間の進歩は我ながら認められたが正田君と堀君の5ファウル退場は痛かった。しかしその直後ストーリングしていると安田君がカットして独崎君僕山尾君と流った速攻はまだよく覚えている。対第二師範戦はたった二点差ではあったがそれはタイムアップ直前正田君の中距離が僅かに外れた所を僕がフォローして入れたものだ。第二師範の山賊然としたガードの口惜しさうな顔は忘れられない。さうだろう。連戦連敗の学習院に敗けたのだから。その他専修大学・暁星OB等は僕にはすでになつかしい名前となってしまった。右に得難プレーを出得ぬ人々はまだ沢山あるが書いていればきりがない。僕がこの頃感ずることはバスケット技術の急速な発展である。今でこそ石島君や塚口君牧君まで大きな顔をしてはいるが三年前の青山のコートの隅で先生にボールをぶつけられて泣きべそうな顔をしているのを覚えているが何とも可愛想であった。それからみると昨今は大変な進歩だとは思ふがその

方向が僕達の頃とは異っている様に感ぜられる。籠球にも革命が来たのだらう。

〝勝たんとするよりも仲間に入る〟と云はオリムピックの精神であるがそのまゝ我が籠球部にも通ずる言葉ではないだらうか。少くとも僕は学習院三年間その気持を持ち続け更に今日に至っている。合宿でもやれば部員の性質はよく分る。欠点も眼につく。しかし籠球への情熱は眼に見えぬ糸で部員を結びつけてゝまゝ。かくして赤裸々な人間のつながりのある所に友情も湧くのであり チームワークも形成される。何事にもせよ一つの事に情熱を傾ける姿は尊く且つ美しいものであり そこに人間としての価値も認められる。僕はこの様な籠球部に籍をおかせて頂いた事を誇りに思っている。又僕の様な我儘な者を暖く包容してくれた籠球部及び渡辺先生鈴木先生荷見さん神林さん始め皆そのほか現在の部員諸君に対し心から御礼を申し上げて筆をおく。

（五月廿一日記）

実力のないもの

正田宏二

〝実力のないもの〟この事の為に我々は当時如何に悩まされたことか。

創立当時は籠球部といふ言葉は一般学生にとっては〝実力のない弱々しいもの〟と云ふ様に思はれた事だらう。「君は何部に入っているんだい。」と問はれて「バスケットレ」と答える時の肩身の狭かった事。こんな事をいつまでも現役諸君には味わる様に思はれるに違ひないが。実際そう感じた僕だけが卑屈であったのかもしれないけれども〝自分達は実力がないのだ弱いのだ〟といふ気持が始終各自の頭の中にあり この為に相当練習をつんで実力をあげた後の試合に於ても不安の為にかへって自分達で試合を不利な方へと導いていた様に思はれる。

昭和二十三年本院としては二度目のインターハイ出場の時に於ても この現象が表れてしまった。一学期の試験が終って直ぐ鈴木先生の御厚意で先生の御宅を合宿所として当時の全部員である六名が合宿練習を行った。

当時の細かいシステム等はもう忘れてしまったけれども一週間の猛練習であった事は未だに憶えている。相選で第一回戦で武蔵と当ると決った時の我々の顔の暗かったこと。武蔵に勝てないといふ弱い気持が何くそ武蔵だってといふ気持よりも強く胸に響いたのだった。いざ試合になって初めは夢中で攻防に大童でありそれでも前半は十九対十八と一点リードして居た。後半に入って一オリードされた時に何くそ直ぐ入れ返してやるといふ強い気魄は現れずにただボーッとしたまゝ何する事なく試合を続けそのまゝ五点の差で負けてしまった。そのチームが関東代表となり結局全□で第三位になったのだから確かに強かったに違ひなく実力

から入って学習院の善戦であったかもしれないが〝驚き〟があったならそれっきり何とかならなかったのだろうか。この試合の後味の悪さは今でも忘れられない。

三四年前の事を思い出さうとすればこの様なことばかりが思い出されて来る。

こゝで現役の諸君特に高等科の諸君に云いたいことは〝我々の経験した失敗を二度と繰り返へすことのない様に自信を持って試合にのぞみ給へ。自信は絶えざる練習に依って得られるであらう。〟

ラ・ラ・き・ゆ・ラ・ラ・話・夜

伊藤博

バスケットボールは現在の我が国では籠球と呼ぶことになっているようであるが文字が国の中国では蓋球といっているのである。事実私の母校などでも部創立当初には漢文の先生の御考見によって蓋球部と稱していたのである。そして今日となると「らんきゆうし」から「ララきゆうし」へといふのは私にとって單に文字の変化ではなく私達のバスケットボールの成長を物語る実になつかしい思い出なのである。

私達のチームはミス・パスで自滅するのが落であったために蓋球部ではなくて溢給部と改名せよと嘲笑された。そのうちにどうやら球をコントロール出来るようになると天狗が多くなって徒にファンシー・ショットばかり組うようになり これでは籠球部ではなくて弄球部だと怒口された。しかし これらのことはすべて私達のチームの成長の一里塚を示すものであったように思ふ。

スポンジ野球からサッカーへそして体操の時間のバスケットボールに初恋の味を知った頃から数へるともう二五年余りにもなるが年令からいふと私はまだ「ララきゆうし」を云々する年ではない。しかし蓋球部員だったりとても学生諸君には太刀打できないことから考へると籠球に関する限りはどうやら老行の仲間入りが出来るようになった様だ。実際バスケット界から離れて既に十余年になるから急速なプレイの発達から見ても私の籠球は老行であることは間違いない。諸君のプレイを見ていて何か口をさしはさんだりしたくなることなどはまさに老行の趣味であらう。

高等科の部長を拝命して二五年前の純情な若人の心をときめき夢を想ふ起した時から私は老行の趣味に陶して老のくりごとを並べたてる暇がありれば身体に応じた趣味の籠球を楽しみたいものと思っている。しかしコンクリートのフロアは趣味の籠球を楽しむには余りにも固すぎ時代もの雨天体操場や薄汚い部室はともすると老のくりごとを誘ふおそれが多いのである。明るい近代的な環境を整備し愉しい部生活が営める様になって私も趣味の籠球にレクリエーションのひと時を楽しめるようになりたいものだ。

先輩たちの記

渡辺末吾

昭和十四年の晩秋初冬の頃から翌年三月まで当時中等科二年生の全員を強制的に牧場へ連れて行った少年寮（三菱銀行の野球グラウンドの西側にある舗石道に沿って並んでいた乃木院長時代からの建物）の全員六十名近い寮生の大半がフットボールをやった。何で皆があんなに熱中したのか分らないが寮生にとっては実に楽しいものであったようだ。退寮式の前日私は非番だったので所用の為に外出し翌朝寮へ出ると教人の寮監がこんな文句を言われた。「昨日は最高だから見ておきゃあスケットをやろうと思ってあたのに先生は留守にするとはいどい。お陰まで電話を掛けたりして探したが遂に見つからないので皆がガッカリしまったよ。」（当時私は寄宿にあった。）この文句は私にとっては嬉しい文句であった。

その中でも特に熱心だった前見・千坂・草庭・古沢・吉川・四方等が十五年の四月から新たに南が丘に発足した「有志寮」（中学有志の寮）に入ってバスケットボールを続けたが十六年度の少年寮の伊達・芝・坂口・清見（弟）等が加わる。そして夏休みに一週間か十日位お部屋持ちで寮へ集って練習をした。これは二三年前までやっていた様に思う。

正田の指導振りは寮監として出来た年から三年、職員の不足と食糧事情との為に寮は閉鎖せられその四月頃から中等科も勤労動員で疎開が始まり（当時中一の石島の組が先ず小田原に疎開した年には中三の正田の組とその一つ下の組とが内原に疎開した。）ボールを手にする人も少くなった。だが熱心な極めて少数の上級生は時々やってあたやうである。十九年から部が出来た二年間は本当に考えるとしても長い年月のやうな感じがする。

昭和十五六年頃何とかしてバスケットボール部を作りたい上級好者達は熱望してあたが何しろ学校は寄宿舎は特下級生だ新に会に於ける発言権もなく如何ともすることが出来なかった。その頃私はよく言った。「黙って十年やってあなさい。若達が熱心にやってあれば何時かはきっと部に変る。他人が認めてくれないことは第一に他人に認められるだけの価値のあるものになるやうに努力するんだ。」と。

それから丁度十年の月日が流れた。今年は部が出来てから満五年目だと二の四月二十九日にささやかな集りが催された。まことに感慨無量である。

あの頃のチビ公は皆成人した。古沢は既に結婚した。草庭は見る千坂・草庭なども新妻人になってある。部の創設せられた頃の主力をなしてあた旧制高等科の荻田・飯崎・鈴木も旧制大学の業の半ばを終らんとし当時の中等科の主力メ

ンバーを皆大学生だ。

少年家時代、鹿児大附になって暮れた私はとうに初老の坂を越し今では一年に一回か二回僅か五分位引っ張り出されるゲームに香気位。情ないものになってしまった。けれども気持ちは若く精神は強いつもりでゐる。諸君しっかりしなへ。若人に負けては恥ですぞ。

（以上の大部分は他日の集りで話したことだが之を書く事は私の義務だと思って敢てくり返した。）五・五・一〇

附属戦の思ひ出

第一回附属戦当時の思ひ出

堀　聖次

昭和二十一年四月部創立以来着々と部の体制が整備され新学期早々に全員運動部に入部するといふ中等科の方針により大量部員の入部を見る。即ち四月二十三日対平田、同二十五日坂口、石島、同二十六日渡辺入部一時は二十名も多きを数へるに至った。当時の練習は如何なるものであったか今はつきり憶えていないがボール一個で二十人位がパスしたりランニングシュートをしたりなる非能率的な練習であったと記憶している。六月一日の百一年祭運動大会に於て現役対先輩女子部のクラスマッチを行ふ。六月二十四日中等科の初試合を聖学院と行ふ。皆初試合なとて無我夢中でボールを持っていると直ぐ敵に取られてしまいパスは通らず直ぐカットされそのまゝドリブルでシュートを決められてしまふといふ仕末。結果は三十対七で大敗を喫す。これにて一学期の練習を終る。夏休の練習は三期に分けてオンデーハイの猛暑の高野科と共に聖学院がコートに於て七月十二日より十七日迄第一期練習で第二期は八日十一日より十八日迄第三期は八月二十五日より九月五日まで。二期三期共青山の女子部の陣営の使用。金期間中中等科は鹿島戦に備へて鈴木先生監督の下に初めて練習をした。練習は厳しいものであった。日中の暑い日盛りをビッコを引きく信濃町の駅の石段を登り外苑の中を通り野球場の隣りの女子部の陣跡へ二十日間毎日これを通った。

二の時分は始めてホームメイションを受るものを敬った。しかし中々ホームメイションなるものゝ難しい事。因に言いて置かされゝば一応合。又ディフェンスが附かずに形のみならばどうにか出来る。しかし一度ディフェンスが附くと大変だ。パスが廻らなくなる。ガード間のパスですら九トされてしまふ。いはんやポストへのパスに於ておや。ホームメイションを失敗する毎に「何やってるのだ」「そんな事が出来なくてどうするのだ」「バスケットをなんかやかしまし」と怒られた。しかし幾もこの仕組でへこたれる者はいなかった。皆汗と涙ともつかない塩からい水浦をポタポタたらしながら頑張った。目前にせまった附属戦を見ざして……

九月に入りて学期が始ると共に本院の屋外コートで練習を行った。附属戦迄に二三回の練習ゲームを行ひ九月十八日遂に第一回の附属戦の日がやって来た。当時の附属中は関東大会で優勝し東京の中学の一流中の一流チームであり云ても勝味はなかった。我々としては今まで練習して来た事を遺憾なく発揮して唯力一杯全力を盡して試合を行ふ為に二組のみが目標であった。コートは明大体育館。審判は協会の牧山・高橋両氏。選手入場。附属中学三年生。実際中学科長後藤の後前主将の挨拶。唯一回の附属の主将林君の手を握るのみ。十分間程練習の後遂に試合開始のホイスルは高らかに鳴った。ボールは牧山文部の手を離れた。それからは無我夢中体は硬直し足はすくみ膝はガク〳〵……

初めのシュートが入る度毎に附属の応援団の声援拍手が聞えるのみ。時間は刻く間に過ぎ何等為す術なくタイムアップ。満場騒然たる中に第一回の附属戦は終った。スコアは四〇対八。唯附属戦が終ったといふことが肩の重荷が消え去ったといふ感じ。

附属
(C) F 林 井 田
C 本野 穴 林
G 根 田 小 小

翌日国体予選兼秋季東京大会第五支部予選に出場。第一回戦に大泉中へ於たかし」と対戦す。大泉は非常に苦かったが一かし院軍は日の浅き為の満足のプレイとなし。終末先生にアタックを命ぜられるも充実なし。院軍リードの中に前半を終り初めてのリードに意気揚々と引揚げて来ると突然全く突然全然予期せぬお叱りを受けた。「アタックしないのだ。アタックとはどうすることだ。」と。一同返答に窮す。後半もリードをしゝに我々は初めて対外試合で勝つことが出来た。

十一月四日一寸考へる所あって学期半ばではあるが主将を牧に申ずる。十一月八日上野で上級人戦を行ふもあやふしを見て五年も出場す。この試合を以て第二学期の練習を終る。

創立間もない部として色々不便な

F 院島本 三口
F 木石橋見坂
C (C)
G 堀江
G 渡

事必困難なことはあつた。しかしそ
の当時の苦労が努力の結晶が現在の
部であることを考へると辛かつた事
も楽しい思い出である。現在の又將
来の高等科の部員諸君は創立当時の
多くの先輩の苦労を考へられ又部の
創立者なる荷見先輩が蹴球部のモッ
トーとして掲げられた「真剣」であ
れしといふお言葉を守つてよりよき
部の伝統を建設されんことを希つて
つたない筆をおきます。

第二回附属戦雑感

牧　忠男

学制の改革に伴ひ従来の中等科が
新制高等科と呼ばれるやうになり二
年が最上級となつて前主將堀見の後
を受け継ぎ主將の大任を仰せつかつ
た。当時の実力はまだ〳〵創立間も
ないため思はしくはなかつたが第
一回附属戦二大敗を喫した直後の対
大泉戦に初の勝利を得たのは
[illegible]
に[illegible]化した城北石神
井大泉と張り合へる大会への出場権を得
て二回戦にまで進出し新く蹴球部も
注目されるやうになつて来た。さう
して秋季国民体育大会東京予選第五
支部予選で再び九高には名をなさし
めたが武蔵野丘石神井大泉に大勝し
本大会へ進み蹴球界に学習院の名を
示したのである。この年は者々と
蹴球界に進出していつたのであるが
最大の目的は附属戦でありその為に
連日猛練習が続けられたのであつた。

対聖学院中（六・二四）　30－7　勝
対青山中（八・三〇）　39－10　敗
〃（九・五）　39－23　敗
対六中（九・一〇）　38－8　敗
対城南中（九・一三）　28－7　敗
対附属中（九・二八）　40－8　敗
対大泉中（九・一九）　28－8　勝
対九中（九・二〇）　39－19　敗
対聖学中（九・二七）　23－14　勝
対立教中（一〇・四）　35－29　勝
対上野中（一一・八）　28－8　勝

毎日放課後鈴木監督の熱心な激〻
ノーチの下暗くなるまでボールを追
ひ夏休みには元青山女子学習院コー
トで或る時はボールをぶつけられ目
もかすむ程練習をしたがしかし皆は
黙々としてコートに集り重い足を引
きずつて帰ることが日課で決して練
習をなまける者はいなかつた。練習
以外何物もなくただ練習だけで主將
としては何もしなかつたしする必要
もなかつた。それだけ皆各自が熱意
を持ち自主的であつた。しかしまだ
バスケットといふものに興味を感ぜず
一体何を目分がしているのかバスケッ
トとは一体何であるのかさへ分らな
いやうな状態で監督からつあゝやれ
レつこうやれレと云はれてもどうし
てそうやるのか分らず無意識に機械
的に動いているだけで研究しやうと
する態度に欠けていたといふことは
反省せねばならないと思ふ。当時の
部生活は練習オンリーの生活であつ
たと云へる。

さて新制高等の最大の行事である

附属戦は前年大敗を喫しているだけに「今年こそは」と全員意気の燃え十月八日前年と同様明大体育館に於て相対したのであった。附属に教信も勝る本院応援団に答へるべく我々は更に必勝を胸に誓ひ合ったのである。かくして今泉・唐沢両審判の下主審にトってボールが上げられた。試合は始めから調子よく本院がリードして後半石島をムフタウルで失ったが時既に勝敗は決して居り42-27 タイマーの試合終了の笛は高らかにコートに鳴り響き遂に宿敵附属を十五点の大差をもって破ったのである。当時の感激は今も脳の奥深くしみ込んでこびりついて忘れることは出来ない。一年間我々をこれまで育て下さった鈴木監督を始め先輩方に対し謝ったためて感謝の意を表すると共に更に又明日からの努力を誓ひ夕もやこめる明大体育館を後にしたのであった。

二六・四・十五記

第三回附属戦の思出

坂口知夫

三回目の附属戦の思い出を僕が書くことになったのでそろそろ頭の中でバラバラになり始めたあの日の事を一生懸命まとめて少し書いてみることにしました。一かし思い出キリざ書いてみるとなるとその事がついこの二三日前のやうなことでもあったり又ずっと昔のことであったやうにも思はれてなかなかまとめ難くおまけにあの日の試合の記録が手元にないので僕の頭に割にはっきり残っていることだけを書いてみることにしました。しかしあまり忘れてしまうことが多分にあるかもしれないが前から何か心残りになるへいやなないかと心配です。

あの日は朝から雨が降っていました。この年の二十四年の第三回附属戦から六月に行はれることになったので梅雨時にでも当ったのでしょう。夏休みの壮行会がお神輿を使えずに昔の修身教室今の二〇一番教室で行はれ吾々部員がずらりと教壇に列んで例の神洲男子を歌ってもらいましたがその時部員が全部長靴をはいていたのでこの長靴のコンクール見度いだなんて笑はれたことを覚えてます。

午後の授業を公務休暇にしてもらって電車で坂橋まで行きそこからマーケットの間のグチャグチャの道を縫って都立九高今の北園高に行きました。この九高のコートでは吾々は相手選手その他の試合を何度もやっているので大分コートの様子が分って居りこの点では我々は地の利に恵まれたかも知れません。それに何しろ吾々が去年惨敗して一昨年の雪辱をなした時と同単要らないメンバーで対戦出来るのですから十中七八勝利は吾々物とその前の年の附属戦に感じたような悲愴感と云ったやうなものは余りありませんでした。ところがトレーニングも終って二階の観覧席には附属学習院両軍の応援団が一杯に入りあすこここに先生や友達の顔も見え附属の応援歌や学習院の応援歌

がコートの天井を響かすようになると先刻迄感じていた優越感はどこへやら開会式で附属の先生のお話を聞いたり開始の握手があったりする間も何となく足がブルブルふるえて来てしまいました。こんな状態で試合が始まってしまったので試合の内容など頭にはつきり残って居ずにただコートの入口のベンチに座られた鈴木先生の真剣な目つきに追はれて無我夢中でただ走ったすらボールを追っかけ廻って居たといふ感じです。

本院のスタートメンバーは石島（F）・池田（F）・坂口（C）・牧（G）・橋本（G）で審判は井上（文理OB）・宮川（附属OB）でした。

附属はこの日ローリング戦法を用いて来ました。去年の春のハワイチームの来征以来ローリング戦法がどこも軒並みのものとなっていますがこの頃では試合の始めからこの戦法に出るといふことは余り考へも及ばないことで今考へて見ればどうせ附属だって即席カローリングで大した負荷を与へるものではなかったのでせうがグルグル廻るのに慣れないように一生懸命くっついて廻って居ればガードしている間忘れかけ合ってそれだからと云って離れていればだんだん輪が小さくなって中距離シュートを打たれるなど吾々のボールを早くとって何でも根でもゴール近持って行ってやおうとする気の早いチームにはまどろくさくてやり難いことおびただしかったのです。それに最初の教分で2ゴール位リードされてしまったのでだんだんこっちも出て来てしまって折角こちらの手にボールが入って逆攻が出たかと思うとゴールドのシュートがリングの周りをグルグルと廻って出てしまうなど敵の思ふつぼにはまって前半六点差で終ってしまいました。

後半に入ると吾々もやっと調子を取戻し第三クォーターの終りで一ゴールに迫り第四クォーターに入るや否や遂に同点とし次の一点もリードを保ちつつ結局勝利は吾が手に帰しました。

橋本の強引な突込みのドリブルシュート石島の体が崩れながら放ったワンハンドシュートの幸運の一ゴールそれにつれて湧き起る応援団の歓声など試合は終始緊張していました。しかし吾々がリードされながらも何となく負けはしないぞといふ信念がチームの上に漲っていてそれが勝利をもたらしたのかも知れません。

こんなことを思ひ出して筆を進めて行ったら何枚書いても書き足りなくなりそうなのでこの辺りで一応打ち切ることにします。しかしあの時からもう二年経ってしまふのですね。そしてあの時共に闘ったプレーヤーが今では同じ大学チームのプレーヤーになっています。あの頃から見て吾々のバスケットは進歩しているのかしら。ボヤボヤしていると学生生活なんて直ぐ終ってしまいさうです。そしてもう吾々も若い若いですまされないような気がして吾々自身の研究した身についたプレイを待たなければいけない頃だと思います。

最後に今後の附属戦の必勝を願ひつゝ強く立派な附属庭球部を目指して大学高等科共に努力することを心掛けます。

第四回附属戦の回想

広沢貞信

昭和二十五年三月牧坂・石島・西諸兄の大学進学によつて生じた穴は余りにも大きかつた。さらして新学期の始まると共に先づ新部員の獲得に全力を尽した。一応十名近くの新部員を獲得したのであるがその中に経験者は僅かに一名。しかも一学期の間一年生の試合出場は罷りならぬといふ掟で実際に試合に出場得るものは三年四名二年一名合計五名最小限度の五名で従つて僅か一人でも故障すればすぐに大きく響きチームとしての練習もなかなか思ふように出来ない状態であつた。やがて来るべき附属戦を前にして遂にラグビー部から以前バスケットをしていた中部を借りることゝなり絶えず人数の不足になやまされながらも鈴木先生並びに大学諸兄の好意ある指導の下に日々の練習を重ねたのである。

かくして第四回附属戦は六月二十四日前年と同様北園高校に於て学習院二勝一敗のあとを承けて行はれた。附属は昨年度上級と変らないメンバーであつたが試合は先づオ一クオーター附属が速攻の失敗等の乱れに乗じて中部の挙げた先取得点で我に有利に進んだ。しかしオニクオーターの以後相手が落着きを取りもどすと共に今度は相手のペースに巻き込まれ我が方の攻撃も中盤なく遂に 44－22 のスコアーを以て敗れたのである。後で反省して見て始めから我々の練習は不足であつたこゝではあつたが大きな敗因はオ一クオーターの敵の乱れに乗じた有利を持続し得ずに相手のペースに捲き込まれてしまつたことと相手の速攻を止め得なかつたディフェンスの弱さが挙げられると思ふ。上同時にチームとしての統一量の不足といふもつたしみじみと感じた次第である。

ともかく先生を始め先輩及び後輩諸兄の御熱心に副え得なかつたことは何とも申し訳のない次第でありまして、お詫びすると共に諸兄の好意ある御指導に対し衷心より感謝するものである。

さて長年お世話になつた学習院を去り他の大学へ進学した今日在学当時の数々の思い出の中一番なつかしいものは何と云つても庭球部での部生活である。さらしてその間に於て得る所の多かつたバスケット並びに学習院庭球部に絶ち難い強い愛着を抱くものである。ニヽに今後の学習院庭球部の発展と諸兄の御健斗を切に祈るものである。

大學創立期の籠球部

櫻井　徹

昭和二十四年學習院に大學が創設された時籠球部員は実に私一人であった。その為何とかして新部員を沢山入れ部の形だけでも整えたいと思っていたのであるが結局何もせずに夏になってしまった。併しその七月頃が復學したのを始め要求出身の佐原等二三の部員が入部したので俄に息をつき十一月の都下新制大學大会（旧高専を含む）に旧高三年が三名を加へて出場する事が出来た。結果は学芸大学に勝ったが準決勝で瀬古堵、遠藤らを含む武蔵大学と対戦31－14で敗れ三位に終った。大学としての試合はこれだけであったがその年の十二月全日本綜合選手権東京予選に全学習院クラブとして初出場した。鈴木先生を始め籠球部、旧大学新高を混えて一回戦に強豪学士クラブと対戦前半拮戦をしたが後半地力を発揮されて大敗した。この時の小六は本大会で準々決勝まで行ったのであるから一回戦で当ったのは運がなかったと言はねばなるまい。

当時の大学籠球部では大学だけでは思ふにまかせず全て高等科と共同して行った。実際の所我々としては当時高三にあったレギュラーが一日も早く大学に入ってくれる事を切望していたのが本音であったのである。併し実際その当時は大学そのものが出来たばかりで不安定であって運動部として活動したのが野球部のみであった事を考へればこれも又やむを得なかったと云へる。

昭和二十五年度　大学籠球部の足跡

堀　堅次

二十五年四月都立高校より山田兄を含む新入生の選手を迎えこゝに大学籠球として再発足した。春休高等科と共に約二十日間の練習を本院コートに於て行ひ新制大学東京選手権に出場一回戦明治学院二回戦埼玉と戦ひ一蹴し準決勝に於て学芸と苦戦の末打破り決勝に於て昨年度優勝校の青山学院と対戦一部戦の末決勝した。こゝに部創立以来始めて優勝の栄冠を得し優勝カップを自分紅にもたらした。

勝因は春休二十日の他校に先んじた練習と強固なる団結力チームワークの勝であると思ふ。次で関東学生選手権に出場一回戦山梨と一蹴し二回戦に立教と対戦味方のゴールリング数を奏し一時はリードしたが敵のスタッチ行なったことにより口ーリング思ふにまかせず、ゴール下のホロを押へられ情勢不利休力差を痛切に感じた試合。夏休に皆で湘南国府へ海水浴に行き楽しい二日間を過しチームワークを一層強固にする。大塚兄の御尽力により八日末に御殿場にて合宿練習を行ふ。校外へ出て合宿を行ったのは今回が初めてであったが大過

なく初期の目的を達する事が出来たのは鈴木伊藤両部長の御努力の賜と感謝の外なし。九月末にリーグ戦の関係で他の競技に先がけて四大学対抗を行ふ。何れも大差にて破り全勝にて優勝。十一月初めのリーグ戦迄の間を利用して合宿の不足を補充するために音楽会と文化大会の時に喫茶を開く。部員一同の努力の結果相当の収入を挙げることが出来た。リーグ戦は三ブロックに分けて行はれ我々はBブロックに属し第一週に成蹊と第二週に学芸と第三週明治学院第四週上智と対戦し学芸に係いては辛く打破りBブロックで優勝。二週間間をおいて三ブロックの優勝校により新リーグ優勝決定戦を旧リーグ入替戦の後に明大に於て行つた。第一日に横浜国立大学と対戦ホロを奪はれ速攻出来ず悪戦苦闘の末勝。第二日に青山学院大学と対戦敵のゾーンディフェンスに苦しめられて終始リードを奪はれ辛うとして敗退。第一回の新リーグ戦の優勝を遂げ二位となる。

全日本学生選手権関東予選の得て旧リーグ二部の最下位の千葉大学と一敗一日大と対戦一番戦すれども敗退す。二十六年一月全日本綜合選手権に出場第一回戦一橋クラブAと対戦一全員のファイト遂に一橋を圧し一点差をもつて勝す。かくて旧リーグ二部の二位一橋大学チームを中心とした一橋クラブAを破り旧リーグ二部と同等の実力あることを実証せり。

この試合をもつて今年度の終りとしシーズンオフとなつた。

一九五一年より未来への抱負

大塚洋三

我が部の創立五週年を迎え過去の苦難多き時代を顧る時吾等はその苦難が立派に結実し輝しい発展の歩みを遂げている事を知り先輩諸兄の歩まれた道に対して感謝と尊敬を覚える。吾等が先輩より輝かしい伝統と厳史を承け大学として各学年に部員の充実した今日未来への抱負の一端を披瀝せんとするものである。

昨秋のリーグ戦に於て敵たり勝利を記録したのであつたが決勝に奮斗空しく青山学院に屈してしまつた。この無念さは今以て胸中を去りやらず燃えなばの意気に燃ゆるのである。だが本年度のシーズン開幕を前にして過去を反省し更に思を遠き未来に至すならば眼前の青山撃破は物の数ではないのである。青山撃破は一過程であつて究極の目標ではない。吾等が能率人として願ふ究極の目標は国際舞台への進出である。こう論ずるとスポーツを偏つて解釈してる様に思はれるかも知れない。だが吾等がよき学生スポーツマンたらんと志すならば精神的にも技術的にもベストを願ふのが当然でありそのベストの現れが国際スポーツにあると信ずる。吾等がこう願ふ時に忘れてはならないことは「吾等は学生スポーツマンなり」と云ふことである。

学生のそれと職業的それとの相違はたとえ究極の目標が同じであってもそれに到達する手段方法にあるのである。吾等は飽くまでも学生として学問の余暇に行ふスポーツなのである。国際的スポーツ行事が盛んになりつゝある今日この頃になってもこのことが見過ごされがちであることは残念なことである。創立五周年を迎え本年度シーズンを前にしてこの忘れられがちの「至極当り前のこと」を再認識して学生スポーツマンとしての誇りを新にして未来の目標に向って力強くスタートせんとするものである。

我が部の現状は未だ建設期の域を脱して居ない。これから先の吾等の歩みが部の礎となり部は吾等の上に一段々々築れてゆくのである。そうして学習院の名が存在する限り我が部の生命は脈々として続くその歩みは一時たりとも止ることはない。歩む道上には必ず繁栄盛衰があるにちがいないがそれに一喜一憂することなく常にがっちりとスクラムを組みいつの日かを期して進まんとするものである。斯くする事こそ斯界に学習院ありと名を成す日を近からしめる道であると信ずるのである。

先輩諸兄よ!! かく願ひて日々鍛磨に励む吾等の上に変らざる期待と温かい指導の手を差伸べられんことを!!

部員諸君!! 吾に続け。吾をふみ越え乗り越えて進め。

かくしてこそ我が部の永遠の進歩は約束されるだろう!!

（昭和二六・五・一）

昭和25年度　関東大学新リーグ戦績

	試合数	出場時間	野投率		自由投率		得点	反則	テクニカルファウル	T.S/P.T
石島	8	291分	76/157	0.484	25/46	0.541	177	10		0.608
池田	8	245	48/98	0.490	9/22	0.409	105	5		0.421
坂口	8	314	58/141	0.411	17/42	0.405	133	18		0.424
堀	8	279	25/63	0.396	7/19	0.368	57	16		0.204
牧	8	229	7/29	0.241	0/1	0.000	14	24		0.061
山田	7	95	7/21	0.333	2/6	0.333	16	6	1	0.168
大塚	6	91	9/31	0.290	2/7	0.286	20	10		0.220
小林	6	56	3/13	0.231	0/1	0.000	6	5		0.107
チーム			233/553	0.439	63/144	0.431	528	94	1	

$\frac{T.S.}{P.T} = \frac{得点数}{出場時間}$　　・チーム総失点 273

学習院籠球部試合記録

昭和22年度

6.24	本院第一	30-0	聖学院	負
8.30	〃	50-19	青山中	〃
9.5	〃	39-33	〃	〃
10	〃	38-8	〃	〃
13	〃	28-17	〃	〃
18	〃	40-8	〃	〃
19	〃	28-8	大泉中	勝
20	〃	39-19	九中	負
27	〃	23-14	暁星中	勝
10.4	〃	35-29	立教中	〃
11.8	〃	20-8	上野中	〃
9.27	本院高等科		暁星03	負
10	〃		専修大	勝
10.4	〃		一高	負
12	〃		成蹊	〃
17	〃		水戸	〃
18	〃		東高	〃
22	〃		都立	〃
25	〃		成城	〃

全国中等学校籠球大会

秋季関東高校リーグ

昭和23年度

11.12	本院高等科		武蔵	負
12.16	〃	30-29	学芸館	勝
17	〃		専修大	負
20	〃	54-12	日大予	〃
21	〃	38-19	成城	〃
23	〃	2-0	農歌	勝
〃	〃	2-0	東亜	〃

関東高校リーグ

春季高等リーグ予選

5.1	本院新高	16-14	立教高	勝
8	〃	15-21	大泉高	負
9	〃	37-11	板橋工	勝
11	〃	39-12	都北高	負
14	〃	45-6	城北高	勝
15	〃	28-22	新宿高	〃
17	〃	36-25	大泉高	〃
22	〃	37-30	都工高	〃
22	〃	19-64	武蔵野	負
6.12	〃	35-33	暁星高	勝
19	〃	16-52	京華高	〃
19	〃	24-26	鮫洲高	負
2.1	本院日中	41-20	都立	〃
6	〃		武蔵	〃

全国大学籠球大会予選リーグ

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

練習試合

関東高等大会

〃

都市対リーグ

〃

2・7	本院中	20-18	成城	負	音楽科リーグ
10・8	本院新高	42-27	附属	勝	附属戦
5・29	本院旧高	31-49	松本高	負	関東高校トーナメント
6・12	〃	22-35	暁星OB	〃	練習試合
7・20	〃	28-33	武蔵	〃	インターハイ

昭和25年度

9・9	本院新高	13-40	北豊島	負	
10・28	〃	14-37	成城中	〃	
11・11	〃	25-45	武蔵高	〃	
11・26	〃	15-44	本郷中高	〃	
5・13	本院大学	57-33	明治学院	勝	練習試合
21	〃	32-33	成城クラブ	負	〃
6・14	〃	54-60	都九高OB	〃	〃
17	〃	46-50	明治学院	勝	新制大トーナメント
18	〃	38-22	埼玉大	〃	〃
18	〃	52-51	東京学芸	〃	〃 準決勝
19	〃	40-35	青山学院	〃	〃 決勝
24	〃	61-49	山梨大	〃	関東学生
25	〃	46-62	立教大	負	〃
7・1	〃	1-1	十條製紙	〃	親善試合
8・19	〃	1-1	成城高	引分	〃
28	〃	1-1	浦賀高	勝	練習試合

9・9	本院大学	35-20	金光豊島	勝	練習試合
10	〃	52-69	全成城	負	〃
23	〃	53-59	埼玉大	〃	〃
30	〃	50-35	成城大	勝	四大学リーグ
10・1	〃	60-46	武蔵大	〃	〃
2	〃	75-45	成蹊大	〃	〃
28	〃	60-46	全成蹊	〃	練習試合
11・11	〃	73-34	成蹊大	〃	新リーグ
12	〃	75-33	〃	〃	〃
18	〃	56-49	東京学芸	〃	〃
19	〃	63-56	〃	〃	〃
25	〃	60-37	明治学院	〃	〃
26	〃	55-43	〃	〃	〃
12・2	〃	72-15	上智大	〃	〃
3	〃	30-12	〃	〃	〃
6	〃	38-36	全成城	〃	練習試合
15	〃	53-51	横浜ビエ	〃	新リーグ優勝決定
16	〃	46-66	青山学院	負	〃
20	〃	68-35	千葉大	勝	全国学法関東予選
21	〃	34-50	日大	負	〃

昭和26年度

1・27	本院高等科	16-36	成城中	負	練習試合

2.3 大院高等科 5.33 戸山高 練習試合
4.22 17 〃 26.51 聖心院 〃
〃 16.53 北園高 〃

全学習院バスケットボール倶楽部会員名簿

○ 名誉会員

渡辺 末吾　新宿区下落合一丁目一四〇六　学習院昭和寮　(95)四四六〇
鈴木 正三　豊島区目白町一　学習院内
伊藤 博　品川区荏原六丁目一一二

○ 正会員

覚 守常　杉並区中通町五六　(39)〇八三五
千坂 智康　世田谷区成城町一一四
細川泉太郎　南多摩郡相原町二四　鶴川山荘
神林 治雄　杉並区馬橋二丁目一九〇　(38)〇四八五
[illegible] 快毅　宮城県宮城郡広瀬町大字下那河三四二〇　(础)〇八〇一
鈴木 久雄　世田谷区成城町五五四　(08)一六四九
鶴岡 寿夫　大田区梨子谷町七九
鈴木泉小山町総番地

安田俊次郎　神奈川県藤沢市中瀬町二七八四
山尾 威大　港区麻布東鳥居坂町五
正田 宏二　豊島区目白町四丁目三
河村 東哉　品川区品川五丁目一九七四
坂本 整士　杉並区高円寺三丁目二〇〇
広沢 真信　目黒区鷹番町九二　(48)〇八三五
一川 真一　世田谷区大蔵町一五〇五　(86)一八九六
宮島 清　台東区東坂町八　(49)三七五七
三浦 長定　千代田区神田駿河台二丁目　(38)二七二〇　(08)一六六一　(25)二七一六

大塚 洋三　世田谷区代田一丁目〇七
山田 英雄　新宿区下落合一丁目八〇四　(95)三七〇五
笠原 慶彰　港区芝東町五三　(45)一二八〇
堀 敬次　杉並区馬橋二丁目一〇四
櫻井 徹　渋谷区代々木山谷町一一六　(37)一五二五

○ 準会員

1.19 本院大学 48.47 一橋大 勝 全日本東京予選
20 〃 40.46 北洋大 負 〃

坂口	郁夫	中野区中野通り三ノ五六	(58)一三三〇
牧	忠男	杉並区西荻窪三ノ一七	(39)一二七七
石島	董章	藤沢市鵠沼六六三二	鵠沼 七
池田	彰宏	大田区西蒲田四ノ一三五	(02)二一二四
小林	公太	杉並区天沼一ノ一九	
上原	豊三	港区麻布宮村五四	
反町	定夫	渋谷区大和田町九五	(48)〇六三〇
大野	英丸	豊田区谷区北沢三ノ一〇〇九	(46)一五四一
青木	啓輔	北区袋町二ノ九四	松沢三五三五
末永	進敏	鎌倉市大町七五三	
米倉	清美	杉並区高井戸四〇二 松田寅之助方	
内藤	一彌	豊田区谷区三宿町一九八	
宮田	誠太	杉並区下井草五	
久保	治彦	豊島区目白町四ノ六二	(33)二〇一八
金子	明雄	中野区多田町二四	
佐藤	雅彦	練馬区貫井町四二〇	
小西	敏之	中野区鷺宮一六	
伊藤	正樹	大田区雪谷町七七一	(08)四一四一
新宮	恭正	練馬区豊玉上二ノ五	
大塚	直重	品川区小山八ノ五一四	
高橋	新太郎	豊島区西巣鴨三ノ九八六	(08)三三六八
東	昭	世田谷区玉川瀬田町一一五〇	
河村	清	大田区新井宿一ノ二二九六	(06)〇九六九

編輯後記

編輯委員の諸方の御力添えを別項の一隅に、籠球部への名を掲げ幸せとはなくとも満足とした意気に燃えて我が籠球部が発足して以来五年の年月を数へます間に今や輔仁会の中で押しも押されぬ世故不動の地位を得ての重鎮として自他共に認める様になりました事は部関係者の皆様に感謝する所であります。創立五周年の二の記念すべき号に当りまして当部では部誌を発刊致す運びになりました。之により部関係者の親睦交見の交流を図り更に又智の発展に寄与せんとする次第であります。内容につきましては必ずしも期待副み得ず又かく発行が遅れました事は諸種の理由があるにせよ編輯の担当者として誠に申し訳なく思って居ります。併し乍ら多くの困難と悪情の下にも不拘一応之だけ纏りましたのは一重に部関係者皆様の理解ある御協力の賜と厚く感謝致して居ります。次号からは内容の充実に一層努力し必ず御期待に副ひます様心がけるつもりで居ります。終りに臨みまして部の今後の発展を希望致しますと同時に諸兄の一層の御後援をお願ひ申し上げる次第であります。尚誌面をお借り致しまして本誌発行に御協力下さいました先輩方先輩現役部員諸兄殊に印刷方面に多大の御尽力下さいました山尾先輩に厚く御礼申し上げます。

（河村記）

學習院蹴球部スケジュール

8月5日～8日　高等科練習・於本院コート・午後4時
8月10日～19日　大学合宿練習・於下諏訪小学校・宿舎
長野県諏訪郡下諏訪　丸屋旅館
電話（下諏訪）8033
8月10日～17日　高等科合宿練習・場所大学と同じ
8月20日～27日　高等科練習
8月28日～9月1日　第五回国民体育大会参加準備
9月上中旬　第五支部大会
9月1日～5日　大学練習
9月14日～16日　四大学対抗
第一日　武蔵・学習院　武蔵・成蹊
第二日　成蹊・成城　武蔵・学習院
第三日　成城・武蔵　成蹊・学習院
10月27日～11月25日　関東バスケットボール連盟新リーグ戦
第第リーグ戦
10月27・28日　学習院・日体
11月3・4日　学習院・明学
10・11日　横浜国立・学習院
17・18日　大学・学習院
24・25日　学習院・武蔵

★会員名簿つづき

○準会員

竹原　敏　世田谷区成城町七九四
筧　達郎　練馬区中村町一ノ九二五
根岸　隆夫　世田谷区下代田町二八一
毛利　元英　新宿区下落合三ノ一七六〇
林　炳龍　中野区鷺ノ宮四ノ四九一

★会員名簿訂正

米倉　清美　杉並区西荻窪一ノ一九六

部報　創刊号　昭和26年7月31日印刷
昭和26年8月1日発行
発行者　全学習院バスケットボール倶楽部
編輯者　河村卓武
印刷者　山尾威大